

13・14世紀の Great Chart マナーに おける直営地耕作について

能 登 征 夫

目 次

- I 問題の所在
- II 直営地耕作の推移
 - 1) インフィールド・アウトフィールド制
 - 2) 播種面積の推移
- III 耕作の拡大・縮小の背景(1)
 - 1) 修道院の穀物需要
 - 2) 穀物価格
- IV 耕作の拡大・縮小の背景(2)
 - 1) 穀物の生産性
 - 2) 農業収益
- V 結語

I 問題の所在

カンタベリ司教座聖堂付属修道院 (Canterbury Cathedral Priory, Christ Churh) が中世ケントにおいて展開した所領経営を明らかにすべく、筆者はこれまでに若干の研究成果を発表した¹⁾。これはとはいずれも、ケント州に存在した諸マナーの農業経営あるいは牧畜経営を対象としたものである。このうち農業経営については、耕地制度と穀物輪作、穀物の生産性、修道院の穀物調達を論じたにすぎず、直営地耕作の展開に関してはほとんど触れることができなかった。本稿では、すでに発表した成果を踏まえつつ、ケント州内の1マナー、Great Chart における直営地農業の一端を考察する。より具体的に言えば、1279～88年と1308～14年にみられた穀物生産の著しい拡大がいかなる動機に基づいて行われたか、あるいはまた、それ

らがいずれも短期的な現象に終わったのは何故か、を明らかにすること、これが本稿の第1の目的である。

カンタベリ修道院の所領経営を論じた唯一とも言うべき概説書を著した R. A. L. Smith によれば²⁾、この修道院は1225年以降、それまでの食物貢納を中心とする所領経営を改め、遠隔地のマナーを除いた諸マナーにおいて領主による直営地経営を開始した³⁾。経営に拍車がかかるのは Henry of Eastry が修道院長に就任した1285年からである。彼は開墾や干拓を積極的に推進して新たな土地を獲得し、一部をより高い地代で農民に貸出すと同時に、直営地の拡大を行った。彼はまた、主要な商品作物であった小麦の作付面積を拡大するとともに、生産性を高める方法として当時の農業書が奨励していた石灰や泥灰土の散布、種子の交換を行った⁴⁾。1331年に Henry が死亡した後、あるいはそれ以前から修道院の所領経営に対する姿勢が消極的なものになるが、その背景には1314～16年の3カ年にわたる洪水・飢饉・農業不況、1325～26年の大旱魃と27年のペストの流行があった⁵⁾。このような危機的状況の中で人口の減少が生じ、農業労働者の賃金が上昇した。農民に週賦役を課していなかったケントでは早くから雇傭労働力に依存する直営地経営が確立していたため⁶⁾、賃金の上昇が経営を直撃し、修道院の所領経営に対する熱意を失わせることになったのである⁷⁾。

以上が Smith の所説の概略であるが、本稿の考察期間の大半は Henry が所領経営に力を

傾注した時期にあたり、とくに14世紀初頭はSmithによって「最盛期」とみなされた時期にあたる。Smithは市場を目的とした所領経営(high farming)のピークを1306～24年に求めたが、その根拠となったのは、分析した15マナーのうちの10マナーにおいて穀物と家畜の売却収入がこの間に最高値を記録したことである⁹⁾。彼の分析対象に含まれなかったGreat Chartにおいても、後に述べるように、この時期に農業経営の規模はピークに達しており、Smithの結論それ自体を否定することはできない。しかし、売却収入を指標とする彼の立論には大きな問題がある。牧羊をほとんど行わなかったこのマナーでは農業が所領経営の中心であったが⁹⁾、穀物と家畜の売却収入は、穀物生産がピークにあった1308～14年よりも、不振だった1290～96年のほうが多かった¹⁰⁾。それゆえ、売却高をメルクマールとすれば、農業が不振であった時期を所領経営の最盛期とみなさねばならなくなる。このように、売却収入を基準とする方法には疑問があるが、これとは別に「売却収入」そのものにも大きな問題がある。

「売却収入」が問題であるのは、それが農業経営の重要な部分を反映していないからである。穀物に限定して一例をあげれば、それが修道院や他マナーに納付された穀物を全く考慮していない数字だからである。マナーは修道院の穀物調達基地の機能を持つものであり、納付穀物は修道院にとっても、マナーにとっても重要な意味を持つものであった¹¹⁾。再生産にとって不可欠な種籾・現物給・飼料などを収穫から控除した残余、すなわち余剰はマナーで売却されるか、修道院や時には他マナーに送付されたが、納付穀物をマナーの「売上げ」とみなす慣習がなかったためであろう、それがマナー会計報告書に「売却収入」として計上されることはなかった。このため、売却収入を指標とするSmithの手法ではこの部分が欠落することになり、農業経営の実態を正確に表現することは不可能になる。後にみるごとく、余剰に占める納付穀物のウェイトがかなり高いことを考慮す

れば、むしろ危険であると言えよう。

売上高を指標とする直営地経営の分析には以上のような問題がつきまとう。これを避けるには、農業経営であれ、牧畜経営であれ、会計報告書には現れない「収入」や経営費用をも考慮した「収益」にまで踏みこむ必要があろう。その計算は容易ではないが、収益の面から穀物生産の著しい変動を分析すること、これが本稿の第2の目的である。

本稿はCanterbury Cathedral Archives Collectionに収められたGreat Chartマナーの「荘役会計報告書」(*Compotus servientis de Magna Chert, Serjeant's account of Great Chart*)のオリジナル・マニュスクリプトを分析したものである¹²⁾。

考察期間は13世紀第4四半紀から14世紀第1四半紀のおよそ50年間であるが、とくに14世紀初頭が分析の中心である。

この修道院の会計年度はミカエルマス(9月29日)から次年のミカエルマスの前日までの1年であり、暦年では2カ年にまたがる。例えば、Edward II世の治世第32年の会計報告書は1303年の9月29日から1304年の9月28日までのさまざまな経済活動を記したものであるが、本稿では、表記の便宜上、これを1304会計年度とは表さず、単に1304年とした。それゆえここでは、特別の注記がない限り、「1304年」は1303年9月29日から1304年9月28日までの1年を表す¹³⁾。

II 直営地耕作の推移

本節では、はじめに直営耕地の利用状況について播種面積の推移を考察する。

1) インフィールド・アウトフィールド制

Great Chartマナーの直営耕地は、この修道院の他の多くのマナー同様、大小さまざまな多数の耕地片で構成されていたが¹⁴⁾、それらは、地形上の特徴からupland (*terra susana*), weald (*wald*)と名づけられた2つの耕地区分

のいずれかに存在した。「高台」「高地」を意味する upland は軽質で地味の乏しい Lower Greensand Belt と呼ばれる砂岩層にあり、「森林」「林地」を意味する weald は排水に難のある重粘土層にあった¹⁵⁾。このため, upland も weald も 穀物生産に適しているとはいえない耕地であったが、とくに後者は石灰肥料である泥灰土 (marla, marl) の散布を必要とする劣等地であった¹⁶⁾。

穀物生産にとって好ましい条件に恵まれなかったこのマナーでは、ミッドランド地方を中心に中世イングランドにおいて広くみられた「三

圃制」(three-field system)を採用せず、劣悪な土壤に適合的な「インフィールド・アウトフィールド制」(infield-outfield system)を採用していた。これは中世ケントの諸マナーで行われていた方法であり¹⁷⁾、多数の耕地片を一定の輪作パターンのもとでほぼ規則的に耕作される部分(インフィールド)と、適当な間隔において随時耕作される部分(アウトフィールド)の2つに分けて利用するシステムである。このマナーのインフィールド・アウトフィールド制を示した第1表によりその実態をみる¹⁸⁾。

表からはさまざまな点を指摘することが可能

第1表：インフィールド・アウトフィールド制

年度	耕地 区分 耕地名	upland										weald									
		インフィールド					アウトフィールド					アウトフィールド									
		Eastfeld	Hankenham	Heghefeld	Westfeld	Chelmersh	Claricelonde	Colrede	Horstgheshoke	Werdeker	Wertyng	Blowerede	Caldecourt	Eydecourt	Longered	Picotteslonde	Reple	Roghehode	terra marlata	Wyleghenered	
(1) 1304	W B O b 28 8 37 2			P v 10 34			O 10	W O 9 6		W O 12 11											
1308	b p v 4 12 21	W B O 14 6 35	W 73	v W 10 4			O 18	v 11	O 12									W 9			
※ 1310	B O 10 41	b v 7 7	W 41	P v 8 32	W 10			W 8	O 11	O 11	O 9			W 20					W 14		
1311	b p v 6 9 18	W B O v 14 10 28 4	W 94	O W 10 4			O 18	v 11	W 12	v 9		W 13	W 20						O 14		
※ 1312	b p v 7 7 2	O B O 14 7 35	W O 54 4		W 4							W 13	W 20	W 5							
1313	B O 9 43	b v 7 7	W 42	P v 10 24	W 10			W O 18 8	W 11	O 11	O 9	v 13		O 20			W 26		v 14		
1314	p v 9 20	W B O 14 12 30	W 85	v W 10 4			O 26	O 11				W 13		v 20					W 14		
(2) 1316	B O 7 22	O b 4 4	W 15	P v 13 18			O 10	O 16		W O 7 4											

(3) 1318	W 50	O 14	v 15	B O P v 8 41 8 8	W 10			W 6								b 5		
※ 1319	B O 8 44	b 14	W 44	p v 10 25			O b 11 7			O 10	O 12		O 18		O 5			O 14
1320	p v 7 22	W 14	B O 11 36	W 65			O 58		O 12						W 5			
1321	W 51		p v 11 10	B O 7 66	(4)		O 50		v 11	W 11						O 26		
1324	W 42	O 14	p v 8 15	B O b 7 50 8				W O 17 13	v 12	W 23						b 5		
1325	W B O 46 8 32			p v 8 24					W 11	O 12					b 18	W 5	O 26	O 14
1327	W 47	W 14	p v 10 13	B O v 9 47 12	W 10	O 4					O 9		W 13	b 18	B O 2 3			O 14

- 〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert* in the Cathedral Archives Collection. ただし、※を付したものは Ann Smith, 'A geographical study of agriculture on the Kentish manors of Canterbury Cathedral Priory 1272-1379' (unpublished M. A. thesis, Liverpool Univ., 1961), Appendix B-ix より引用。
- 〔備考〕 上段のアルファベットは作物の種類（W：小麦，B：大麦，O：オート麦，b：ソラマメ，p：エンドウ，v：カラスノエンドウ）を，下段の数字は播種面積（単位：エイカー。1エイカー未満は切り捨て）を示す。なお，耕地区分の判然としない Colton, terra Alex, Elancelonde は表にふくめなかった。
- 〔注〕 (1) この他に小麦が11エイカー播種された（耕地区分，耕地名とも不明）。
(2) upland では，この他に小麦が34エイカー播種された（耕地名不明）。
(3) weald では，この他に小麦が22エイカー，オート麦が34½エイカー栽培された（耕地名不明）。

であるが，ここでは本稿の展開上必要な諸点を述べるにとどめる。

○恒常的に利用されるインフィールドはすべて upland にあるが，upland のすべての耕地片が常時耕作されていた訳ではなく，一部がアウトフィールドとして利用された。

○weald 内の耕地はすべてアウトフィールドとして位置づけられていた。

○インフィールド，アウトフィールドを問わず，作付の行われた耕地片のそれぞれが必ずしも全面的に利用された訳ではなく，一部を余して作付されることが多かった。

○栽培された作物は小麦 (*frumentum*, wheat), 大麦 (*ordeum*, barley), オート麦 (*avena*, oats), ソラマメ (*faba*, beans), エンドウ (*pisa*,

peas), カラスノエンドウ (*vesca*, vetch) である。小麦とオート麦が最も多く，大麦が最も少なかった。

○小麦の作付はインフィールドを中心に行われたが，1310～16年にはアウトフィールドにまで拡大された。

○オート麦は，全期間を通じて，インフィールド，アウトフィールドの別なく広く栽培された。

○大麦の播種はきわめて少なく，しかもほぼインフィールドに限定して行われた。

○豆類は，三圃制下の休閑にあたる時期のインフィールドを中心に栽培されたが，アウトフィールドでも小麦やオート麦と連作された。

以上を相互に関連づけて要約すれば，

①穀物生産の中心であるインフィールドですら地力が乏しく、栽培には種々の努力が必要であった。豆類の作付はその一例であり、地力の維持・回復が目的であった¹⁹⁾。

②したがって、豆類はそれ自身の収穫もさることながら、主穀生産をバック・アップするために植えられており、その作付は主穀生産に連

動して変化した。

③小麦について商品価値の高かった大麦の栽培が少ないのは、土を選ぶとされる大麦にとってこのマナーの土壌が合わなかったことを示しており²⁰⁾、増産は困難であった。

④休閑地あるいは休耕地が常に存在するため、穀物生産の拡大は容易であった。その1例

第2-1表：播種面積（単位：エイカー）

年 度	小 麦		大 麦		オ ー ト 麦		豆 類		合 計
	a.	%	a.	%	a.	%	a.	%	a.
1275	63	32.3	24	12.3	74 (1)	38.0	34	17.4	195
1278	78½	38.2	18	8.7	62 (2)	30.2	47	22.9	205½
1279	63¾	28.1	23½	10.4	93 (3)	41.0	46½	20.5	226¾
1282	64¼	30.1	29½※	13.8	72¼※	33.8	47½※	22.3	213½
1283	66½※	28.1	22½※	9.5	90¾※	38.3	57 ※	24.1	236¾
1285	63½※	27.0	19	8.0	82½※	35.0	70½※	30.0	235½
1286	71¼	27.7	14½	5.6	103½	40.3	67¾※	26.4	257
1287	73¾	28.4	20½	7.9	92	35.5	73¼※	28.2	259½
1288	75	30.3	21	8.5	87¼	35.2	64¼※	26.0	247½
1289	70¼	32.8	20	9.3	53	24.8	70¾	33.1	214
1290	72½	33.3	21	9.6	53	24.3	71½※	32.8	218
1291	54½	24.0	13½	6.0	68¼	30.0	91	40.0	227¼
1293	70½	38.9	10½	5.8	50¼	27.8	49¾	27.5	181
1294	69¼	35.9	17	8.8	48½	25.2	58	30.1	192¾
1296	71¼	38.0	12	6.4	47	25.0	57½	30.6	187¾
1299	62½	30.2	13	6.3	78	37.7	53½	25.8	207
1300	65	31.0	14½	6.9	82¼	39.2	48	22.9	209¾
1301	59¾	28.6	11	5.3	88	42.2	50	23.9	208¾
1303	69¾	34.9	10	5.0	77½	38.7	42¾	21.4	200
1304	60½	33.6	8	4.4	64¾	35.9	47	26.1	180¼
1308	102¼	44.1	6	2.6	65	28.1	58½	25.2	231¾
1311	158¼	53.1	10	3.4	70½	23.6	59½	19.9	298¼
1313	107	37.6	9	3.2	91¼	32.0	77½	27.2	284¾
1314	132	48.2	12¾	4.7	67	24.5	62	22.6	273¾
1316	56½	35.7	7½	4.7	58½	37.0	35¾	22.6	158¼
1318	88½	39.7	8	3.6	90	40.3	36½	16.4	223
1320	85	36.8	11	4.7	106	45.9	29	12.6	231
1321	62½	25.7	7	2.9	142	58.3	32	13.1	243½
1324	82½	37.5	7¾	3.5	82	37.2	48	21.8	220¼
1325	62	30.1	9	4.4	85	41.2	50	24.3	206
1327	84¾	37.2	12¼	5.4	78	34.2	53	23.2	228

〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert.*

〔注〕 (1), (2), (3)は、それぞれ、24a., 10½a., 16a. の drege corn を含む。※を付したものは、史料に播種面積の記載がないために、前後の時期の一般的なエイカー当りの播種量から割り出した数値である。

が1308年に始まる著しい小麦栽培の拡大である。これが短期的な現象に終わったのは、作付の拡大が劣等地であるアウトフィールドを舞台にして行われたためである。

2) 播種面積の推移

1275年から1327年までのおよそ半世紀間の播種面積を小麦、大麦、オート麦、豆類の4つに分類して示したものが第2-1表である。

最初に総播種面積について。

指摘すべき第1の点は、年度によって面積が大きく変動していることである。最小値は1316年の158¼エーカー（以下、a. で表記）で、最大値は1311年の298¼ a. である。後者は前者のおよそ1.9倍になる。1316年は前年からの長雨と洪水によって作付の大幅な減少を余儀なくされた、いわば例外的なケースであり、これを除外して比較することも可能であるが、この場合でも最小値は1304年の180¼ a. であり、1311年の約60%にすぎない。このような大きな差異は別としても、数エーカーから数十エーカーの間でたえず変動しており、伸縮自在な作付が常態になっている。これは、すでに述べたごとく、適宜利用されるアウトフィールドが存在したこと、三圃制のもとでは休閑にあたる時期に豆類が作付されたこと、インフィールドの耕地片に播種される場合でも余裕のある作付が行われたこと、による。それゆえ、1年ごとに播種面積が変動することはインフィールド・アウトフィールド制のもとではむしろ自然であり、問題にする必要はないように思われる。

総播種面積について指摘できる第2の点は、耕作の活発な時期と不活発な時期が明確に識別できることである。考察期間の総面積の平均は約223a. であり、これを基準にすれば、両年とも平均以下であった1275～78年、82年を除いてすべて平均を上回った1279～88年、91年を唯一の例外として他はすべて平均を下回った1289～1304年、大幅な拡大を示した1308～14年、その後の1316～27年、の5つの時期に区分される。これを便宜上第Ⅰ期、第Ⅱ期……としてその平

均を示せば、

第Ⅰ期（1275～78年）……200 a.

第Ⅱ期（1279～88年）……240 a.

第Ⅲ期（1289～1340年）…203 a.

第Ⅳ期（1308～14年）……271 a.

第Ⅴ期（1316～27年）……217 a.

になる。穀物生産の著しい拡大と縮小が交互に繰り返されていること、第Ⅳ期の播種規模が異常に大きいものであること、は明らかである。

つぎに、こうした現象が生じた事情を第2-2表を用いて考察する。

第2-2表：平均播種面積（単位：エーカー）

区分・期 間	小麦	大麦	オート 麦	豆類	合計
I 1275～1278	71	21	68	40	200
II 1279～1288	68	22	89	61	240
III 1289～1304	66	14	65	58	203
IV 1308～1314	125	9	73	64	271
V 1316～1327	75	9	92	41	217

〔備考〕第2-1表より作成。

第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけての40a.（20%）の作付の拡大は主にオート麦と豆類によってもたらされたものであり、第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけて減少した37a. の約65%（24a.）はオート麦生産の縮小によるものである。豆類の播種が主穀生産に連動して行われるものであったから、第Ⅰ期から第Ⅲ期までの総播種面積の変動はオート麦の作付の拡大と縮小を反映したものである。

第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて68a.（約33%）の増加がみられるが、その大半（59a.、約87%）は小麦が占めていた。第Ⅳ期から第Ⅴ期にかけては54a.（約20%）の減少がみられるが、これはほぼ小麦の減少分（50a.）に相当する。オート麦が豆類の減少分（23a.）を相殺する形で19a. の増加を示しているが、これは小麦生産の縮小をカバーする目的で行われたものであろう。それゆえ、第Ⅲ期から第Ⅴ期までの総播種面積の変動は小麦生産の拡大と縮小を反映したものの

である。

このように、前半の播種面積の著しい拡大と縮小はオート麦生産の変動によってもたらされたものであり、後半のそれは小麦生産の変動によってひきおこされたものである。

最後に、作物ごとに播種面積の推移をみる。

小麦は第Ⅰ期から第Ⅲ期まではわずかながら減少傾向を示していたが、第Ⅳ期に至って突然生産が著しく拡大された。しかし、ピークは長くは続かず、長雨と洪水のダメージを受けた1316年以前に生産は縮小された。縮小されたとはいえ、第Ⅴ期の播種規模は第Ⅲ期までの水準を上回っており、修道院が依然として小麦生産に意欲をもっていたことが窺われる。したがって、第Ⅴ期を穀物生産の衰退期とすることはできない。

オート麦の生産は第Ⅱ期に著しく拡大されたが、これも長くは続かず、第Ⅲ期には第Ⅰ期の水準以下にまで縮小された。その後は徐々に拡大し、とくに小麦の作付が激減した第Ⅴ期にはピークに達し、小麦生産を陵駕するまでになった。すでに触れたごとく、これは小麦の作付縮小による穀物生産の不振をオート麦によって補おうとする修道院の経営努力を示すものであろう。

大麦は、当初から最も重要性の低い作物であり、穀物生産の拡大や縮小とは無関係に栽培されていた。第Ⅲ期以降ますますその比重は低下した。

豆類はそれ自身の生産目的とは別に、いわば主穀生産の補助的機能を果たすものであったから、小麦やオート麦の著しい変動に照応して増加あるいは減少した。

Ⅲ 耕作の拡大・縮小の背景(1)

この節では、前節で明らかにした穀物生産の著しい変動と修道院の Great Chart マナーに対する穀物需要および穀物価格の関連性を考察する。

穀物生産の拡大や縮小は、言うまでもなく、

それが領主にとって有利あるいは不利と判断された結果行われたものであるが、そうした判断の根拠となる要素はさまざまであろう。例えば、領主の穀物需要、穀物価格、穀物の生産性、農業収益などが考えられる。これらはすべて相互に関連するものであり、どれか1つを他と切り離して考察することは困難であるが、ここでは相互連関を意識しつつ、それらを個別に検討する。

1) 修道院の穀物需要

カンタベリ修道院でも所有する多くのマナーから穀物を納付させ、その必要量を確保していた²¹⁾。納付される穀物の種類と量は、マナーごとに異なっていたばかりでなく、同じマナーでも1年ごとに変化していた。このことは修道院が各マナーの播種や収穫の状況を十分に把握していたことを示すものであり、また、各マナーの穀物生産がマナー群全体の生産計画の中で決定されていたことを示すものである²²⁾。

修道院はケント州内に存在した30余のマナーを2つの管轄区に分け、それぞれに *custos* (*custodian*) と呼ばれる役職修道士をおいてマナー・グループを管理していた。1つは11マナーで構成される East Kent 管轄区 (*custodia de Eastekent*, East Kent custody) で、肥沃な東ケント地域の諸マナーが中心であった。いま1つは Great Chart を含む20マナーで構成される Weald 管轄区 (*custodia de Waldia*, custody of the Weald) で、穀物栽培に適さないマナーが多かった²³⁾。1288年を例にとれば、修道院は必要とする小麦と大麦の大半を前者から、オート麦の過半を後者からそれぞれ調達した²⁴⁾。

Great Chart はWeald 管轄区の中ではオート麦、小麦を納付する極めて重要なマナーであった²⁵⁾。穀物の納付、売却、購入を示した第3表を用いて修道院のこのマナーに対する穀物需要を分析する。

大麦は5年にわたって納付されたが、余剰が生じて納付されたのは1275年の一年のみであ

第3表：穀物の納付・売却・購入

年 度	小 麦			大 麦			オ ー ト 麦			豆 類		
	納 付 qr. bu.	売 却 qr. bu.	購 入 qr. bu.	納 付 qr. bu.	売 却 qr. bu.	購 入 qr. bu.	納 付 qr. bu.	売 却 qr. bu.	購 入 qr. bu.	納 付 qr. bu.	売 却 qr. bu.	購 入 qr. bu.
1275	▲6 0(1)		8 5	15 0	3 0				2 9		10 4	
1278		28 5	0 3			17 1		16 0	3 5		3 6	0 2
1279	45 0	40 0			0 2	6 4½		7 6½	12 3½		3 2½	3 1
1282	37 0	27 7½	0 4			18 3½	15 8	9 6	7 4		7 0	
1283	24 0	22 3½	6 2	9 0(2)		9 0	23 0(3)	1 5	11 14½		13 5	7½
1285	17 7	74 6			2 0	12 11½	11 0½	19 12	0 8	9 3	23 1	
1286		62 5½	0 2			7 7	24 0	12 8			33 3	11 0
1287		63 3½				10 2	30 0	7 10½	1 0	15 0	14 6	5 0
1288	33 4	60 2½	0 2	6 0		12 1		2 10½	0 8	10 0	15 0	
1289	22 4	38 1½		15 0(4)		26 4½	10 0(5)	4 4½		2 7	21 4	
1290	6 0	51 2				25 1½	26 8	1 0½	15 4	6 0(6)	25 4	9 0
1291		86 4				24 6½	20 14	7 7	3 0	5 0(7)	13 0	
1293	33 0	42 7½				35 1	17 2	3 12			3 5½	1 6
1294		82 5				26 1½	34 8	5 5	1 14		3 0	
1296		34 1½	5 0			33 3½	31 0	2 1½	1 6		13 6	
1299		34 6	16 0		0 7	36 5	71 6	3 5½	7 3			2 0
1300	70 0	37 1½	21 0			13 0	44 0	8 1	2 8		2 0	
1301		73 0		3 6½	0 1½	12 4½	54 0	2 3			20 6	
1303		63 7				18 2	45 0	3 13½			9 0	
1304		83 1½				29 7	51 0	21 0			21 5½	
1308	24 0	32 6½			0 5	25 0½	29 13	6 4		3 0	29 4	
1310		66 7½			1 7½	30 4½	40 0	9 8			1 0	
1311	32 0	11 5½				32 6¼	39 0	11 3			10 4	
1313	24 0	74 4				42 1½	30 0	18 1½	12 0		8 2	
1314	18 0	52 4				49 6	33 0	21 7			21 6	
1316	18 0	10 1½				28 4½	20 0	1 8				
1318	22 0	27 6¼				35 7¼	6 0	1 8	5 12			2 0½
1320		50 5				23 3½	35 0	17 14½			3 0½	
1321	20 0	60 6½			0 1	22 2½	27 6	10 14			0 7	
1324	26 4	37 1½				17 4	28 3	15 1			15 2	
1325	40 0	24 5				33 5		4 4¾				
1327	60 0	18 5				19 6¾	26 8	9 11¼			2 0	

〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert*

〔注〕 (1) Little Chart マナーからの受入分である。

(2) Welles マナーへの 6qr. の送付分を含む。

(3) Welles マナーへの 7qr., Copton マナーへの 6qr. の送付分を含む。

(4) Welles マナーへの 10qr. の送付分を含む。

(5) Appledore マナーへの 6qr. の送付分を含む。

(6) Appledore マナーへの 1qr. の送付分を含む。

(7) すべて Welles マナーへの送付分である。

り、他はいずれも、1283年の例が示すごとく、
収穫のみでは納付分を捻出できず、購入によっ
てその分が穴埋めされた。大麦の生産高は再生

産に必要な量に達せず、購入によって必要量を
確保するのが通例であったから、その納付はむ
しろ例外的なことであった。豆類の余剰は売却

されるのが普通であり、大麦同様、納付は例外的であった。

回数・量いずれにおいても最も多く納付されたのはオート麦であり、ついで小麦であった。オート麦、小麦とも、1275年を除き、常に余剰を生み出しており、その購入は一時的な穴埋め、あるいは種子の交換のために行われたものである。余剰を納付・売却の内訳でみると、オート麦は納付にウェイトがおかれ、小麦は売却が中心であった。それゆえ、修道院にとってはGreat Chartは何よりもオート麦納付マナーであり、小麦の納付は副次的なものであった。

以下、オート麦、小麦の順に、播種面積と修道院の穀物需要の関連性を考察する。

オート麦は1282年以降、1288年、1325年を除き、毎年納付されている。1288年、1325年はいずれもオート麦が不作の年であり、収穫から再生産に必要な種籾、現物給、飼料などの経常支出分を控除すれば、残余はわずかであった。このため、1288年、1325年の2カ年は納付を免除されたものと解される。このように理解すれば、このマナーは1282年以降、オート麦納付マナーとして位置づけられたことになる。1275～79年に全く納付が行われなかったのは、オート麦の納付義務を負っていなかったためであると考えられる。75年、79年には余剰がなく、むしろ不足が生じて購入されており、78年には13クォーター11ブッシェル（以下、qr., bu. で表記）の余剰が生じたにもかかわらず、それは納付されることなくすべて売却された。75年、79年を納付が一時的に免除された年とみなすことも可能であるが、78年の例および82年以降の継続的な納付を考慮すれば、むしろ、1279年までは納付義務を負っていなかったとするほうが合理的である。

このように、Great Chartは1279年まではオート麦の納付マナーではなかったが、その後一転して納付を義務づけられるマナーに変わったことになる。この転換を可能にしたのは、前節で述べた1279年に始まるオート麦生産の著しい拡大である。言い換えれば、修道院は、79年

までは納付を期待していなかったものの、その後方針を変え、播種地の拡大を実現した上で納付義務を負わせるようになったのである。それゆえ、1279～88年の著しいオート麦生産の拡大は修道院の需要の高まりによってひきおこされたものであったと言えよう。

小麦の納付は1279年に始まるが、オート麦と異なり、納付を強く義務づけられていたと言いはない。とりわけ1304年まではそうである。このことは、1275～1304年に納付回数と未納回数が同じことで明らかである。ところが、1308年以降には事情が一変し、納付が原則になっている。1310、20年に納付が行われなかった事情は不明であるものの、これは1308年以降に修道院のこのマナーに対する小麦需要が著しく強まったことを示すものである。1308年は小麦生産が大幅に拡大された年であり、それゆえ、生産の拡大が修道院の需要の増大に対する対応策であったと結論づけることができよう。

以上から明らかなごとく、前節で検討した小麦とオート麦の著しい作付の拡大は、修道院の穀物需要の高まりによってひきおこされたことになる²⁶⁾。この結論を別の観点から補強しておきたい。

小麦であれ、オート麦であれ、生産の拡大期には特別の配慮が払われた。それは泥灰土の散布である。その費用は、オート麦生産の拡大期には2ポンド7シリング8ペンス（1279年。以下、£, s., d. で表記）、£1. 16s. 7¼d.（1283年）、£2. 13s. 2¾d.（1285年）、£1. 19s. 11d.（1286年）、£1. 11s. 1½d.（1288年）、小麦生産の拡大期には£2. 13s. 3¾d.（1304年）、£7. 3s. 4½d.（1308年）、£7. 2s 2¼d.（1310年）、£11. 15s. 0d.（1311年）であった。1300年代に費用が多くなっているのは、対象が小麦であったこと、しかもその作付の拡大が大幅であったことによるものであるが、次節で触れるごとく、この費用は、除草、溝掘り、柵作りなどの通常の農作業費に比べて異常に多いものであった。経営を圧迫しかねない多額の経費を投入してまで播種地を拡大したのは、生産の拡大が切

実なものであったことを示しており、この意味で、それが修道院の要求に応える以外の目的を持つものであったとは言い難い。

ところで、生産の大幅な縮小と穀物需要の関係はどうであろうか。1289年以降のオート麦の納付、1316年以降の小麦の納付は、いずれもそれ以前と同程度もしくはそれ以上である。これは売却量を減らして行われたものであり、修道院の需要が依然として強かったことを示している。したがって、播種地の著しい縮小は穀物需要とは無関係に生じたことになる。

2) 穀物価格

穀物の年平均価格を算出するにあたり、小麦、オート麦、豆類については売却価格を、大麦については購入価格を利用した。このマナーでは大麦は購入が一般的で、売却が例外的だったからである。それぞれの平均価格は第4表に示したが²⁷⁾、この価格は、売買が一度しか行われなかった場合にはそれを 1qr. あたりに換算したものであり、取引が複数回行われた場合には取引ごとにえられた 1qr. あたりの価格を単純平均したものである²⁸⁾。単純平均価格を用いたのはつぎの事情による。すなわち、史料の欠けた年度の多い Great Chart の価格データのみでは価格変動を示すには不十分であり、このマナーと類似の価格がえられ、かつ事例が豊富に存在する他マナーのデータを援用する必要がある。この点で最も適していたのは、ウィンチェスター司教領を構成するハンプシャーの2マナー、Mardon & Ecchinswell であるが、そこでの小麦価格が単純平均で示されていたからである²⁹⁾。Great Chart とハンプシャーの2マナーの小麦価格は第1図に示した。

第4表と第1図を用いて播種面積と価格の関連性を検討するが、穀物生産に占めるウェイトがきわめて小さい大麦と、地力の維持・回復を目的として主穀に連動して作付された豆類を対象から除き、小麦とオート麦についてのみ考察する。

播種面積は、トータルでみても、作物ごとに

第4表：穀物の平均売却価格（1クォーター当り）

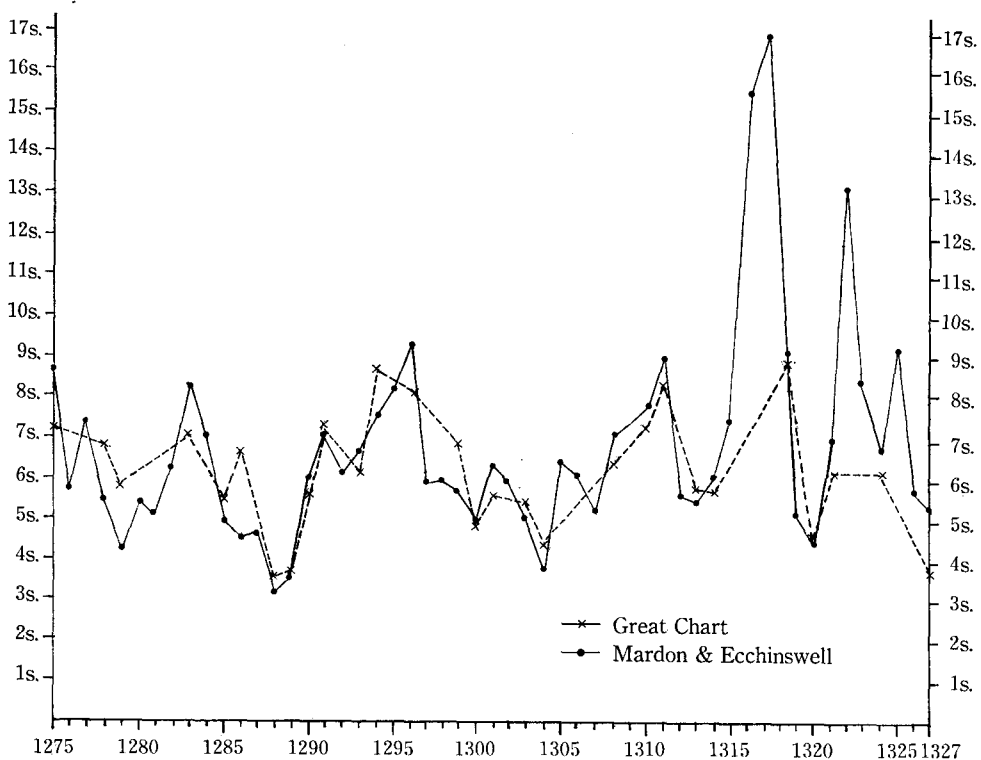
年度	小 s.	麦 d.	大 s.	麦 d.	オート麦 s.	麦 d.	豆 s.	類 d.
1275	7	3※	6	0	3	9※	4	0
1278	6	10	4	6※	4	2	3	0
1279	5	10	2	10※	3	8	3	10
1282	6	8	3	2	4	1	4	0
1283	7	0	3	4	4	3	5	0
1285	5	7	3	8	3	10	2	9
1286	6	7	2	9※	3	11	2	9
1287	5	2	2	5※	3	0	2	10
1288	3	6	1	10※	2	8	1	10
1289	3	8	2	9※	3	4	2	10
1290	5	4	2	9※	4	0	1	11
1291	7	3	3	10※	5	4	5	6
1293	6	8	3	5※	5	0	5	0
1294	8	9	3	8※	5	0	4	11
1296	8	3	4	6※	4	3	6	0
1299	6	11	3	7※	4	9	—	—
1300	4	10	4	0※	3	7	1	8
1301	5	7	2	9※	3	6	1	11
1303	5	5	3	0※	4	0	3	1
1304	4	5	2	8※	5	1	2	9
1308	6	4	3	6※	4	0	2	10
1310	7	6	4	7※	5	1	3	0
1311	8	3	4	4※	4	3	3	5
1313	5	9	3	7※	4	2	3	0
1314	5	8	4	0※	4	0	2	10
1316	(16	0)	8	2※	(12	0)	—	—
1318	9	3	5	0	6	8	—	—
1320	4	6	3	0※	3	8	2	10
1321	6	2	3	3※	3	7	3	0
1324	6	2	3	10※	3	10	3	2
1325	8	4	5	2※	5	0	—	—
1327	3	10	2	7	2	10	—	—

〔出所〕 *Comportus servientis de Magna Chert.*

〔注〕 ※を付したものは購入価格であり、一は売買が全く行われなかったことを示す。また、1316年の（ ）内の数値は近隣の Ebony マナーのものである。

みても、2年続けて同じことはまれであり、毎年変動していた。これがインフィールド・アウトフィールド制そのものに由来するものであったことは前節で述べたが、ここでそれが価格とは無関係な現象であったのかどうかを確認しておくべきであろう。例えば、小麦価格が 6s.

第1図：小麦の平均売却価格



〔出所〕 Mardon & Ecchinswell の価格は J. Z. Titow, *English Rural Society 1200-1350*, p. 98 (Appendix A), Great Chart の価格は本稿第3表。

7d., 5s. 2d., 3s. 6d. としだいに下落した1286～88年に、小麦の作付面積は $71\frac{1}{4}a.$, $73\frac{3}{4}a.$, 75a. とわずかずつではあるが逆に増加している（第2－1表参照）。これは1年ごとの播種面積の小さな変化が価格とは無関係に生じたことを示すものである。それゆえ、本節ではこうした小さな変化を対象から除き、大きな変動についてのみ分析する。

まず、1308～14年の小麦栽培の拡大とその後の縮小について。

第4表から明らかなごとく、1300～04年の小麦価格は、1291～99年の高価格（平均で7s. 7d.）から一転して低水準（同5s. 1d.）に下落した時期である。データの欠けた1305～07年をハンプシャーの2マナーでみても、それは6s. 5d., 6s. $1\frac{1}{4}d.$, 5s. 2d.（同5s. 11d.）であり、作付の著し

い拡大が直前の数年間の価格に反応したものであるとは言い難い。価格との関連性を見出すとすれば、1308年に始まる価格上昇である。08～11年の価格は6s. 4d., 7s. 6d., 8s. 3d.（同7s. 4d.）であり³⁰⁾、1300～04年に比べて2s. 3d., Mardon & Ecchinswell の05～07年より1s. 5d. 高くなっている³¹⁾。したがって、1308年以降の生産の拡大が同年からの価格上昇に反応したものであると考えることも可能であろう。しかし、価格が5s. 9d., 5s. 8d. と下落した13～14年にも作付は依然として高水準に固定されたままであった。生産が価格の上昇に対してのみ敏感に反応し、下落に対してほとんど反応しなかったことを合理的に説明することは可能であろうか。また、同じ高価格期であった1291～99年には反応せず、08年に至って初めて反応した

ことを肯定的に解釈することは可能であろうか。否、である。それゆえ、1308年に始まる小麦生産の拡大と1316年以降の縮小を価格と直接的に関連づけることは困難である。

つぎに、1279～88年のオート麦栽培の拡大とその後の縮小について。

第4表で明らかごとく、拡大直前の1275～78年、拡大期の79～88年のオート麦価格は、生産が低調であった91～99年よりも低い水準にあった。しかも、拡大期後半の85～88年には価格がよりいっそう低下したにもかかわらず、播種面積は逆に増加している。それゆえ、オート麦についても、生産と価格の間に明確な関係を見出すことは困難である。

以上のように、小麦とオート麦の著しい作付面積の増加・減少は価格の上昇・下落を直接の原因として行われたものではなかった。

Ⅳ 耕作の拡大・縮小の背景(2)

この節では、穀物生産の著しい変動と穀物の生産性および農業収益の関連性を考察する。

1) 穀物の生産性

本稿では、土地の生産性ではなく、種子の生産性、すなわち収量を播種量で割った収穫倍率(yield ratio per seed)を用いるが、価格や面積と異なり、そのデータをえるには大きな制約がある。ある年度に播種された作物の収量はそのつぎの年度の会計報告書にしか記載されないため、連続した2会計年度分の報告書が必要になるからである。このため、生産性に関するデータは価格や面積のそれに比べてかなり少なく、ここでの考察は不十分なものにならざるをえない。以下、第5-1表、第5-2表を用いて、小麦とオート麦について生産性と播種面積の関係を考察する。

まず、1308～14年の小麦の拡大とその後の縮小について。

第5-1表から判断する限り、1303年までの生産性には大きな変化がなく、生産性が1308年

第5-1表：小麦の生産性(収量/播種量)

年 度	播 種 量 qr. bu.	収 量 qr. bu.	倍 率
1278	39 2	122 6	3.13
1282	32 3	74 3	2.30
1286	35 5	103 2	2.90
1287	36 7	141 2	3.83
1288	37 5	117 5	3.13
1289	35 1	92 6	2.64
1290	36 2	113 2	3.12
1293	35 2	115 1	3.27
1299	31 2	86 1	2.76
1303	34 2	116 5½	3.41
1313	49 7	135 5½	2.72
1320	42 2½	113 3½	2.68
1324	40 5	97 1	2.39

〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert.*

に始まる作付の大幅な拡大を促す要因であったとは考え難い。13年以降、生産性はしだいに低下しているが、これは、08～14年の拡大や、縮小されたものの依然として高い水準にあった16年以降の作付が劣等地であるアウトフィールドに及んで行われた当然の結果を示すものであろう。このように、生産の拡大が生産性の低下をひきおこすことは十分に考えられることであるが、これを08～14年において確認しておくべきであろう。

データが13年の1例しかなく、分析するには不十分な第5-1表を補うために、1308～14年の収量と播種量の平均値を用いて生産性の近似値を求めた³²⁾。この間の平均収量は127qr. 2bu.で、平均播種量は58qr. 6bu.である³³⁾。前者を後者で割って2.17倍の生産性がえられる。拡大直前の1299～1304年のそれは2.85倍であり³⁴⁾、作付の拡大が生産性を著しく低下させたことになる。泥灰土の散布にもかかわらず生産性が著しく低下したことが小麦生産縮小の原因になったことは明らかであろう。

つぎに、1279～88年のオート麦の拡大とその後の縮小について。

第5-2表には拡大直前のデータが78年の1例しかないため、ここでも小麦と同様の操作を

第5-2表：オート麦の生産性（収量/播種量）

年 度	播 種 量 qr. bu.	収 量 qr. bu.	倍 率
1278	25 11	35 10	1.39
1282	36 2½	67 15	1.88
1285	41 3	94 8	2.29
1286	49 11	96 2	1.93
1287	42 14	75 11	1.77
1288	40 11	70 0	1.72
1289	26 3	54 11	2.09
1290	26 2	71 12	2.75
1293	25 2	71 15½	2.86
1299	34 8	111 6	3.23
1300	36 18	116 2	3.13
1303	33 4	106 9	3.20
1313	38 1½	90 8	2.38
1320	45 2	127 6½	2.82
1324	35 11	47 13	1.34

〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert.*

〔備考〕 1299～1303年の数値は冬蒔きと春蒔きを合計したものである。

行って数値を求めた。75～79年の生産性の近似値は1.37倍であり³⁵⁾、拡大期の生産性を下回る。それゆえ、拡大が生産性によってひきおこされたとは考え難い。拡大期の生産性は85年の2.29を最高にわずかつづではあるが低下傾向を示している。拡大直前の数値よりも高いものの、これは泥灰土を散布した上での数値であり、これが生産縮小の引き金になったことは明らかであろう。

以上のように、小麦、オート麦とも、拡大については生産性との関わりを見出すことは困難であるが、縮小については生産性の低下が大きく影響したことは確かである。生産性の悪化と直営地耕作の縮小の関係は他所領においても看取されるが³⁶⁾、ここでは Great Chart に限定して若干の言及を行いたい。

このマナーにおける生産性の低下は、小麦やオート麦の播種拡大が劣等地にまで及んで行われたことの当然の結果であった。作付の拡大がこのような結果を招くことは、マナー経営の専門家である荘役や修道院の所領管理責任者には十分理解されていたはずである。このことは穀

作の拡大期に集中的に肥料が散布されたことで明らかである。それゆえ、ただ単に生産性が低下したことで彼らが生産規模を縮小したとは考え難い。むしろ、つぎに検討するごとく、多額の散布費用を投入したにもかかわらず、予期した成果がえられなかったこと、これが縮小を決断させた最も大きな要因だったのではないか。言い換えれば、生産性のみならず、費用対効果の視点からも生産の縮小を説明すべきであろう。生産の拡大が泥灰土の散布とともに開始され、散布の終了後に生産の縮小が始まっていることがその根拠である。

2) 農業収益

農業経営における収益の計算には大きな困難がつきまとい、正確な数値を与えることは事実上不可能である。例えば、修道院に納付された穀物は評価額といった近似値を用いざるをえないし、家畜群の一部にしかすぎない農耕用牛馬の飼育費用を牧畜経営費全体から切り離して計算することも困難である。しかし、本稿の目的は厳密な収益計算を行うことにあるのではなく、穀物生産の変動と収益の関係を明らかにすることにある。この目的のためには、以下の手続きによってえられた数値を用いて分析することも許されるであろう。

収入はマナーで実際に行われた売却と納付穀物の評価額を加えたものを用いた³⁷⁾。支出は、会計報告書の農業関連費目のうち、上級役職者として複数のマナーの管理に責任を負っていた *custos* と荘宰 (*ballivus*, *steward*) への支払い、固定資本である穀物倉や納屋などの建築・修繕費、家畜の購入費を除いた残りの費目の合計とした。したがって、経営費用として算入されたものは穀物の購入費、犁と荷馬車の購入・修繕費、除草・収穫・施肥などの直接的な農作業費、ファミルスの給金、荘役と下役 (*bedellus*, *beadle*) への支払いである。

マナーの穀物生産はこのような支出に支えられて行われたのであるが、本稿で問題とするのはその生産高ではなく、余剰である。したがっ

て、収穫のうち、種粃、現物給、飼料など再生産に必要な部分は費用面に現れない経常支出として処理し、売却されたり、納付された余剰分のみを収入とした。それゆえ、ここでの「収益」は、余剰穀物の評価額とそれを生産するために投入された経費の差額である。

このような方法で求められた収入と支出の内訳を1299～1304年、1308～14年の2つの時期に分けて示したものが第6－1表である³⁸⁾。

1299～1304年は穀物生産が低水準にあった時期であり、1308～14年は小麦の作付面積が最大に達した時期であった。1299～1304年と1308～14年の収益の平均はそれぞれ£15. 7s. 4d., £9. 5s. 9d. であり、小麦生産がピークにあった時期のほうが£6. 1s. 7d. 少なくなっている。これは生産の拡大が収益を悪化させたことを意味するが、収入の平均はそれぞれ£33. 11s. 11d., £34. 12s. 7d. であり、1308～14年のほうがわ

第6－1表：収入・支出の内訳

(1) 1299年～1304年

	1299年	1300年	1301年	1303年	1304年
	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
穀物の売却収入	13 3 11	11 7 0¾	26 0 11	19 11 1¾	24 2 11
納付穀物の評価額	16 19 0	24 16 0	9 19 6	9 0 0	12 19 3
収入合計 (A)	30 2 11	36 3 0¾	36 0 5	28 11 1¾	37 2 2
穀物の購入費	10 10 4¾	11 2 8	1 14 2	2 14 6	3 19 3
犁・荷馬車の費用	2 14 10½	2 11 6½	2 5 4½	1 17 10¾	1 13 7¾
泥灰土の散布費用	0	0	0	0	2 13 3¾
農作業費	1 7 6¾	2 0 6	1 12 4	1 15 2½	1 19 3½
荘役・下役への支払い	5 3 9	4 18 11	4 11 6	4 19 6	4 17 4
ファームスの給金	2 17 2	2 17 2	2 14 9	2 14 5	2 14 9
支出合計 (B)	22 13 9	23 10 9½	12 18 1½	14 1 6¼	17 18 7
収益 (A-B)	7 9 2	12 12 3¾	23 2 3½	14 9 7½	19 3 7

(2) 1308年～1314年

	1308年	1310年	1311年	1313年	1314年
	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
穀物の売却収入	15 10 7¾	28 10 10¼	9 0 7	26 14 3	21 4 2½
納付穀物の評価額	13 19 3	11 16 4	21 9 9	13 3 0	11 14 0
収入合計 (A)	29 9 10¾	40 7 2¼	30 10 4	39 17 3	32 18 2½
穀物の購入費	4 9 8½	8 17 3	7 7 3	9 5 3½	9 6 8
犁・荷馬車の費用	1 12 11¾	2 11 7	2 14 6½	2 8 4½	2 2 9
泥灰土の散布費用	7 3 4½	7 2 2½	11 15 0	0	0
農作業費	1 18 11	3 8 9	2 4 4	1 17 2	1 11 8
荘役・下役への支払い	4 16 11	4 17 8	4 17 2	4 16 8	5 1 8
ファームスの給金	2 14 5	2 15 5	2 15 5	3 0 5	3 0 5
支出合計 (B)	22 16 3¾	29 12 10½	31 13 8½	21 7 11	21 3 2
収益 (A-B)	6 13 7	10 14 3¾	▲ 1 3 4½	18 9 4	11 15 0½

〔出所〕 *Comptus servientis de Magna Chert.*

〔備考〕 1311年の収益欄の ▲ はマイナスを表す。

ずかながら多くなっている。それゆえ、収益悪化の原因は支出面に求められるべきである。支出の平均は、1299～1304年の £18. 4s. 7d. に対し、1308～14年は £25. 6s. 10d. で約 £7 多い。

支出の内訳をみると、犁・荷馬車の費用や農作業費、荘役やファームスの人件費に大きな差が認められないのに対し、穀物の購入費と泥灰土の散布費用に大きな差が生じている。穀物の年平均購入費用は £6. 0s. 7d. と £7. 16s. 10d. でその差は約 £2 であり、泥灰土の散布費用の平均は 10s. 8d. と £5. 4s. 1d. で約 £5 の違いがある。このように、1308～14年の収益を悪化させた原因は穀物の購入と泥灰土の散布、とくに後者に求められる。

泥灰土の散布は、小麦をアウトフィールドに播種してその生産を拡大するために行われたものであり、いわば生産拡大に伴う必要経費であった。多額の経費を投入したにもかかわらず、効果はほとんどみられなかった。1299～1304年の播種量と収量の平均は 31qr. 5bu., 90qr. 0bu. であり、1308～14年のそれは 58qr. 6bu. と 127qr. 2bu. であった。1308～14年のほうが播種量で 27qr. 1bu., 収量で 37qr. 2bu. 多くなっているが、このことは、37qr. 2bu. の追加的な生産の増分をえるために 27qr. 1bu. の種籾を必要としたことを意味する。単純化して言えば、作付面積をおよそ 60a. 拡大して（第2—2表参照）、27qr. 1bu. の種子を蒔いたにもかかわらず、37qr. 2bu. の収穫しかえられなかったことになる。あるいはまた、年間約 £5 の費用をかけて生産の拡大を計ったにもかかわらず、拡大に伴う種籾の増加によって余剰小麦は少ししかふえず、収支面では肥料投入分の赤字が生じたことになる。

穀物の購入費は、1299年の £5. 9s. 8¾d., 1300年の £8. 6s. 2d., 1313年の £2. 0s. 0d. を除き、他はすべて大麦にあてられたものである³⁹⁾。これを除外して大麦の購入費のみを比較すれば、1299～1304年の平均費用が £3. 5s. 0d. であるのに対し、1308～14年のそれは £7. 9s.

3d. でおおよそ £4 の増加になる。大麦の購入は主としてファームスへの現物給の不足分を補うために行われたものであり、しかも、生産の拡大に伴って現物支給量が増加したことから判断すれば⁴⁰⁾、この出費増は、大麦価格の上昇もその一因である（第4表参照）が、基本的には穀物生産の拡大がひきおこしたものである。

以上のように、小麦生産の拡大は、収入の伸び悩みと支出の増加によってかえって収益を悪化させる結果に終わった。収支状況の悪化は小麦生産の拡大方針を維持する意義を失わせ、短期間のうちに軌道修正を余儀なくさせることになった。

収入の伸び悩みは生産性の低下によってひきおこされたものであり、それゆえ、生産性が小麦生産縮小の主因であったと主張することも可能であるが、本節の 1) ですでに述べたごとく、所領管理責任者であった修道士や荘役にとって、生産の拡大が生産性の低下をもたらすことはいわば自明の理であり、それを避けるために多額の費用を投入したのであるが、予期した成果はえられなかった。そのために方向転換を決断したと考えるほうがベターである。つまり、ただ単に生産性に原因を求めるのではなく、生産性の低下と収益の悪化が相まって彼らの穀物増産の試みを挫き、意欲を失わせたとして主張するほうがより説得的である。

ところで、この解釈は1289年以降のオート麦生産の縮小についても当てはまるであろうか。これを第6—2表を用いて検討する。

すでに述べたことであるが、修道院のオート麦需要の増大に対してこのマナーでは、1279年以降に泥灰土の散布を行いつつ、その作付を拡大した。収益は、79年以降、ほぼ順調に改善され、85年には £21. 9s. 0d. と最初のピークに達した。しかし、その後はしだいに悪化し、88年にはこの間の最低を記録した。82, 87年を除いて泥灰土の散布が行われたにもかかわらず生産性が86年以降しだいに低下したこと（第5—2表参照）、同じ86年から収益が悪化しはじめたこと、しかも88年のそれがこの間の最低水準に

第6-2表：収入・支出・収益の推移

年 度	収 入			支 出			収 益		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1275	10	12	1½	15	3	5½	▲4	11	4
1278	14	17	0	12	17	11¾	1	19	0¼
1279	26	6	8¼	15	15	4½	10	11	3¾
1282	28	7	5½	16	8	5¼	11	19	0¼
1283	25	12	0½	18	13	7¾	6	18	4¾
1285	36	13	8	15	4	8	21	9	0
1286	32	13	8¾	15	4	5	17	9	3¾
1287	23	5	2½	13	1	11½	10	3	3
1288	20	3	3	13	9	7¼	6	13	7¾
1289	18	18	5¼	13	0	6½	5	17	10¾
1290	25	8	10	20	2	6¼	5	6	3¾
1291	44	5	0½	16	6	6	27	18	6½
1293	31	1	9	17	15	10	13	5	11
1294	47	5	3¼	15	12	11¼	31	12	4
1296	25	11	0¼	21	8	11¼	3	2	1
1299	30	2	11	22	13	9	7	9	2
1300	36	3	0¾	23	10	9½	12	12	3¼
1301	36	0	5	12	18	1½	23	2	3½
1303	28	11	1¾	14	1	6¼	14	9	7½
1304	37	2	2	17	18	7	19	3	7
1308	29	9	10¾	22	16	3¾	6	13	7
1310	40	7	2¼	29	12	10½	10	14	3¾
1311	30	10	4	31	13	8½	▲1	3	4½
1313	39	17	3	21	7	11	18	9	4
1314	32	18	2½	21	3	2	11	15	0½
1318	25	11	10¼	25	12	9¼	▲0	0	11
1321	31	15	11¾	16	17	9½	14	18	2¼
1324	30	5	6½	16	10	0¼	13	15	6¼
1325※	28	5	0¾	21	7	10¾	6	17	2
1327	20	9	4¼	16	7	4½	4	1	11¾

〔出所〕 *Compotus servientis de Magna Chert.*〔注〕 1325年の支出のうち、ファムルスの給金の
み不明のため、前年と同額の£2. 15s. 1d.
を加算した。

まで落ちこんだこと、これが89年以降の泥灰土散布の中止と生産の縮小をひきおこした原因であろう。したがって、小麦生産の縮小ほど明確ではないものの、同様の事情によりオート麦生産の縮小が行われたとの結論がえられる。

最後に、R. A. L. Smith の手法との関連で冒頭に述べた1290～96年の収益と、1316年以降の収益について若干触れておきたい。

Smith の「売却収入」を基準とする方法で

はこのマナーの農業経営のピークを穀物生産が不振であった1290～96年に求めざるをえなかったが、第6-2表の「収益」を用いても同じ結論に達する。この間の平均収益は£16. 5s. 0d.であり、穀物生産が最大に達した1308～14年の£9. 5s. 9d. はもとより、その直前の1299～1304年の£15. 7s. 4d. よりも多い。このように、修道院へ納付された穀物を考慮した「収益」でみても、穀物生産が不振であった1290～96年に経営状態は最も良好であった。これをどのように解釈すべきであろうか。筆者にとって今後の大きな課題である。

穀物生産の著しい拡大に終止符が打たれた1316年以降にも修道院は依然として小麦とオート麦の生産に意欲を示していたが、第6-2表から判断する限り、経営内容はいっそうの悪化を示している。18～27年の収入、支出、収益の平均はそれぞれ、£27. 5s. 7d., £19. 7s. 2d., £7. 18s. 5d. である。1299～1304年と比較すれば、支出はほぼ同程度であったが、生産性の低下を反映して収入は£7程度減少しており、これが収益悪化の大きな要因になっている。生産性の向上は望めず、したがって、1327年以降も直営地耕作にとって困難な時代が続くことになる。

V 結 語

以上が、13世紀第4四半紀から14世紀第1四半紀の Great Chart マナーにおいて展開された直営地耕作の分析である。これまでの論点を要約すれば、以下の諸点になる。

1) このマナーでは1279～88年にオート麦生産が、1308～14年には小麦生産がそれぞれ著しく拡大されたが、とくに小麦生産の拡大は異常なまでの規模で行われた。

2) 生産規模の拡大はいずれも修道院のこのマナーに対する穀物需要の高まりに応える目的で行われたものである。

3) 生産の拡大にあたり、このマナーでは多額の費用をかけて石灰肥料である泥灰土の散布

を行ったが、これは作付の拡大が劣等地であるアウトフィールドに及んだための処置であった。

4) 多額の経費を投入したにもかかわらず、肥料散布の効果は不十分であり、短期間のうちに泥灰土の散布は中止され、穀物生産の規模も縮小された。

5) 効果が十分でなかったことは生産性の低下と収益の悪化となって表れたが、とくに14世紀初頭の小麦生産拡大期においてそれが顕著であった。

6) 生産規模の縮小は生産性の低下と収益の悪化が相まってひきおこしたものである。

以上のように、カンタベリー修道院の1マナーである Great Chart では、修道院の要求に合わせて小麦やオート麦の生産を拡大したが、支出の増加に見合う収入の増加がなく、収益が悪化して生産規模の縮小を余儀なくされた。とはいえ、このマナーでは農業経営が中心であったため、14世紀初頭に拡大方針が放棄された後も直営地耕作は13世紀よりも高い水準で維持された。

Great Chart においてみられた直営地耕作の拡大と縮小のプロセスが他のマナーにおいても確認できるかどうかを考察すること、これが筆者の今後の課題である。

(注)

- 1) 牧畜については、①「中世におけるカンタベリー司教座聖堂附属修道院の牧畜経営」(『星陵台論集』第14巻第1号, 1981), ②「1272～1327年のカンタベリー司教座聖堂附属修道院の牧畜経営——Comptus de Stauro の分析——」(同第14巻第2号, 1981), ③「中世におけるカンタベリー司教座聖堂附属修道院の牧羊経営」(『社会経済史学』第50巻第1号, 1984)。農業経営については、④「14世紀前半のカンタベリー司教座聖堂附属修道院領マナーにおける穀物輪作」(『星陵台論集』第13巻第2号, 1980), ⑤「カンタベリー司教座聖堂附属修道院領における穀物の生産性について(1277～1324年)」(同第15巻第1号, 1982), ⑥「13・14世紀におけるカンタベリー修道院とノリッチ修道院の穀物調達について」(同第17巻第1号, 1984)。所領経営全体を対象としたもの

のに、⑦「カンタベリー司教座聖堂附属修道院マナーの『荘役会計報告書』について(1307～1327年)」(同第15巻第2・3号, 1983)。

- 2) R. A. L. Smith, *Canterbury Cathedral Priory: A Study in Monastic Administration*, Cambridge, 1943.
- 3) *Ibid.*, pp. 113～4.
- 4) *Ibid.*, pp. 116～7, 133～6; Dorothea Oschinsky, *Walter of Henry and Other Treatises on Estate Management and Accounting*, Oxford U. P., 1971, pp. 174～8, 325～9.
- 5) Smith, *op. cit.*, pp. 123, 126, 189.
- 6) *Ibid.*, pp. 119～24. 中世ケントにおいて週賦役が欠如していたことは通説になっている。以下の文献を参照されたい。F. R. H. Du Boulay, *The Lordship of Canterbury: An Essay on Medieval Society*, Nelson, 1966, pp. 167～73; N. Neilson, *The Cartulary and Terrier of the Priory of Bilsington, Kent*, Oxford U. P., 1928, p. 26; G. Slater, 'Social and economic history' in W. Page (ed.), *The Victoria History of the County of Kent*, III, London, 1932, pp. 338～42.
- 7) Smith, *op. cit.*, pp. 125～6, 144.
- 8) *Ibid.*, p. 143.
- 9) 前掲拙稿②を参照されたい。
- 10) 1290～96年, 1308～14年の売却収入の平均はそれぞれ, £35. 19s. 11d., £28. 7s. 7d. である。
- 11) 前掲拙稿⑥, ⑦を参照されたい。
- 12) 史料は Canterbury Cathedral Archives and Library に所蔵されているもので、筆者が利用したのはそこから入手したマイクロ・フィルムである。
- 13) 以下の分析における1316年のみは、播種面積を除き、いずれも1315年10月17日～1316年9月29日までの記録にもとづいている。これは途中で荘役が交代したことによる。
- 14) 他マナーの耕地については Ann Smith, 'A geographical study of agriculture on the Kentish manors of Canterbury Cathedral Priory 1272～1379' (unpublished M. A. thesis, Liverpool Univ., 1961) の Appendix を参照されたい。これをもとに作成した論文が前掲拙稿④である。
- 15) Ann Smith, *op. cit.*, p. 41.
- 16) 作物の栽培状況から判断すれば、weald は開墾されて間もない耕地であろう。
- 17) E. Miller & J. Hatcher, *Medieval England—Rural Society and Economic Change 1086–1348*, Longman, 1978, pp. 204～14.
- 18) インフィールド、アウトフィールドの分類は Ann Smith 前掲論文に従った。

- 19) 同じ修道院に属する Eastry マナーでは、収量が播種量に達しなかったにもかかわらず連年豆類を栽培していた。前掲拙稿⑤を参照されたい。
- 20) Ann Smith, *op. cit.*, p. 40.
- 21) R. A. L. Smith, *op. cit.*, pp. 125~6. 1314~16年が長雨と洪水にたたれた時期であったことは、J. Z. Titow, 'Evidence of weather in the account rolls of the Bishopric of Winchester 1209-1350' (*Economic History Review*, 2nd series, XII, 1959-60), pp. 384~7 に詳しく述べられている。これは全イングランドにみられた現象であり、この結果、1315~16年に穀物価格が著しく騰貴した。穀物価格については、D. L. Farmer, 'Some grain price-movements in thirteenth-century England' (*ditto.*, X, 1957-58), pp. 207~20 を参照されたい。
- 22) R. A. L. Smith, *op. cit.*, pp. 207~8.
- 23) *Ibid.*, pp. 100, 140.
- 24) *Ibid.*, pp. 207~9. 前掲拙稿⑥, ⑦。
- 25) 1288年に Weald 管轄区から修道院に納付された小麦は 120qr. であったが、その約28% (33½qr.) を Great Chart マナーのみで納付した。 *Ibid.*, p. 207 及び本稿第3表参照。
- 26) 修道院では1250年以降に穀物の自給が可能になったとされるが (*Ibid.*, p. 42), 本稿で分析した1280年代のオート麦と14世紀初頭の小麦に対する修道院の需要の高まりが、いかなる事情にもとづくものかは明らかではない。
- 27) 大麦価格がオート麦価格よりも低いのは、購入された大麦がファムルススの現物給にあてられるものであったから、品質の劣悪なものが選ばれたことを示すものであろう。
- 28) ½qr. 以下の売買は計算から除外した。品質の悪い穀物の売買が多かったためである。
- 29) J. Z. Titow, *English Rural Society 1200-1350*, George Allen & Unwin, 1969, pp. 97~8.
- 30) Mardon & Ecchinswell の1308~11年の価格は、7s. 0d., 7s. 4d., 7s. 8½d., 9s. 0d. であり、平均は約 7s. 9d. である。 *Ibid.*, p. 98.
- 31) Mardon & Ecchinswell の1305~07年の価格は、6s. 5d., 6s. 1¼d., 5s. 2d. である。 *Ibid.*, p. 98.
- 32) 播種は前年度分の収穫の中から行われるものであり、より正確に言えば、1307~13年の収量と、1308~14年の播種量から生産性の近似値を求めることになる。しかし、生じうる複雑さを避けるために、本稿では単に「1308~14年」と表現した。
- 33) 1308~14年の収穫高と播種量ははつぎのとおりである。107qr. 0bu. と 48qr. 5½bu. (1308年), 118qr. 0bu. と 74qr. 2bu. (1311年), 150qr. 0bu. と 49qr. 7bu. (1313年), 133qr. 6bu. と 62qr. 3bu. (1314年)。
- 34) 1299~1304年の収量と播種量はつぎのとおりである。52qr. 7½bu. と 31qr. 2bu. (1299年), 86qr. 1bu. と 32qr. 4bu. (1300年), 95qr. 0bu. と 29qr. 7bu. (1301年), 100qr. 3bu. と 34qr. 2bu. (1303年), 115qr. 5bu. と 30qr. 1bu. (1304年)。
- 35) 1275~79年の収量はそれぞれ、30qr. 2bu., 43qr. 13bu., 35qr. 10bu. であり、播種量はそれぞれ、24qr. 14bu., 25qr. 11bu., 29qr. 8bu. であった。
- 36) 例えば、ウインチェスター司教領の多くのマナーでは13世紀第4四半紀から14世紀第1四半紀にかけて生産性の低下と直営地耕作の縮小が同時にみられた。 *Ibid.*, p. 51.
- 37) 納付穀物の評価額は第3表の納付穀物量に第4表の平均価格を乗じて求めた。
- 38) 第6-1表の支出項目のうち、「農作業費」は除草・溝掘り・柵作りなどの通常の農作業費であり、「荘役と下役への支技い」は彼ら2人の給金と荘役の食事代(収穫期を除き、1日当たり2d.) などである。
- 39) 1299年には小麦とオート麦、ソラマメの購入が行われたが、その費用はそれぞれ、£4. 5s. 4d., £1. 4s. 4¾d., 10s. 0d. であった。1300年には小麦とオート麦がそれぞれ£7. 16s. 2d., 10s. 0d. 購入され、1331年にはオート麦が £2. 0s. 0d. 購入された。
- 40) 1308~14年の現物支給量は平均で 68qr. 36bu. であり、1299~1304年の 63qr. 2bu. よりも 5qr. 1bu. 多くなっている。

(1991年4月30日受理)